

■第54回企画展 (財)岩手県文化振興事業団設立20周年記念

縄文北緯40° ～前・中期の北東北～

会期 平成17年10月9日(日)～11月27日(日) 会場 特別展示室



■なぜ北緯40°？

岩手県三陸海岸から秋田県男鹿半島までの両県を北緯40°線が貫いています。地球上の座標を示す経緯度線と縄文時代がどう関わるのでしょうか？

今から約5千年以上前の東北地方では、北半で円筒土器、南半で大木式土器と呼ばれる二つの異なった土器が使われていました。興味深いのは、土器だけではなく、住居や様々な道具など、それぞれ独自の特徴を持ち、「円筒土器文化」「大木式土器文化」と呼ぶにふさわしい様子が見られることです。その境界線がちょうど北緯40°線と重なることがわかってきました。

今回の企画展では、両者の違いが際立つ縄文時代前期後半～中期初頭を中心に取り上げ、南北の対比と交流、当時の社会の様子を近年の発掘資料をもとにご紹介します。

■北と南の土器大集合

～円筒土器と大木式土器～

東東北半から北海道南部にかけて広がりを持つ円筒土器は、その名の通り土管に底をつけたような円筒形が主役です。縄文前期の円筒土器下層式、中期の円筒土器上層式に大別され、およそ1千年の間存続しました。下層式は更にa～d式、上層式はa～e式と段階区分がなされています。

1927年にこの土器を命名した長谷部言人博士は、その形を味噌桶や樽などになぞらえている程です。なぜここまで細長くするのか、と思えるほどのプロポーション、そして、器面にはさまざまな縄文原体(＝撚り紐)を用いた装飾が施され、特に前期の円筒下層式のデザインは「撚り紐の芸術」



円筒下層 d 式土器 (部分)  
九戸村田代遺跡 岩手県立博物館蔵

とも呼べる印象を与えています。これが中期の円筒上層式になると、次第に立体的でゴツゴツした装飾が施されるようになります。菅江真澄が鏝に例えた土器も円筒上層式の破片でした。

一方、同時代の北緯40°以南、東北中部～南半に広がる大木式土器は、1920年代に仙台湾の大木岡貝塚を調査した山内清男博士によりその名が与えられました。貝塚の層位により前期の大木1式～6式、中期の大木7式～10式までが編年されています。

大木式土器は円筒土器とは異なり、凹凸



大木 4 式土器 (部分)  
北上市新平遺跡 岩手県立博物館蔵

の激しい形が特徴です。特に、本展で主にご紹介する前期末～中期初頭では「球胴形」あるいは「金魚鉢形」と称される、丸い胴体に足をくっつけたような種類が目引きます。底部が赤く焼けているため、熱効率向上を目的とした形態と考えられます。文様は粘土紐の貼付やヘラ状の工具を使い、やや奔放とも見える図柄が主体となり、円筒土器との違いが際立っています。

展示では北半の円筒土器、南半の大木式土器を見比べて、両者の相違点、共通点を探っていただきたいと思います。



三内丸山遺跡の円筒土器 青森県教育庁文化財保護課蔵

## ■まつりと装い ～土偶と岩偶～

縄文時代を象徴する遺物、土偶にも地域差が明確に表れます。仙台湾周辺から北上川流域にかけては扁平で短いO脚、四角い頭、いくつもの穴がつけられた板状土偶が流行します。細い竹管による文様は大木式土器と共通します（表紙写真）。

一方、東北地方北部では円筒上層式土器に伴い、大きな頭と左右に突き出した手が特徴の「十字形土偶」が広まります。こちらは円筒土器同様に燃り紐を押しつけた模様が数多く見られます。

土偶と関連が深いものに岩偶がんぐうがあります。日本海側の円筒土器文化圏、津軽や米代川流域の一帯に分布する、石で作った“ひとがた”です。加工が容易な凝灰岩ぎょうかいがん、泥岩でいがんなどを用いて菱形に近くデフォルメされた造形で、足や顔面の表現はなく、腕を折り曲げた形態が一般的となっています。

土偶・岩偶ともひとがたには違いありませんが、人間そのものではなく、信仰の対象であった精霊の姿を表現したものと考えられています。



岩偶 秋田県小坂町大袋Ⅳ遺跡  
小坂町蔵（町指定文化財）

## ■交流の証 ～異系統土器が語るもの～

円筒土器と大木式土器は相対するかのよう、北と南で独自に発達していました。ただし、全く相互に行き来がなかったわけではありません。少数ですが青森県で見つ



珞状耳飾 遠野市綾織新田遺跡 遠野市教育委員会蔵

かる大木式土器、山形県で出土した円筒土器といったものが存在します。秋田～山形の沿岸では北陸地方の土器も加わります。

オリジナルから少しずつ変化していることから、土器そのものが運ばれたというよりは、作り手が移動したケース、人の行き来に伴い土器づくりに関する情報が伝わったケースなどが考えられます。実態をより正確につかむため、原料の粘土を分析し、産地を特定する研究が進められています。

## ■エピローグ その後の北緯40°

縄文時代中期中頃になると、次第に円筒文化圏の独自性が薄れていきます。土器には大木式の影響が著しくなり、住居の作り方、石器などの道具でも南北の差が少なくなります。ところが縄文時代後期に入ると、再び40°線以北を中心とこしなしまに十腰内式土器文化圏とも呼ばれるまとまりが成立します。このように、境界線の様子は時代により北上、南下したり、境界そのものの強弱が変わったりと変化を続けます。大きく見れば古代に至るまで、北緯40°線付近が南北の社会の境界であり、また接点でもあったという図式が想定されるのです。今回ご紹介する時代は、南北の違いが際だつ最初のピークであり、その後の歴史を流れる底流が形成された時代とも言えるでしょう。

高木 晃（専門学芸員）

## 【文化講演会】（無料）

11月3日（木・祝） 13:30～15:00 講堂

「円筒土器文化と大木式土器文化」

富樫泰時氏（前秋田県立博物館長）

## 【博物館秋期セミナー】（無料）

10月30日（日） 13:30～15:30 教室

「円筒・大木式土器分布圏の岩偶・土偶・石製品」

稲野裕介氏（北上市教育委員会）

「円筒土器の製作者～胎土分析の成果～」

松本建速氏（東海大学文学部）

11月6日（日） 13:30～15:30 教室

「円筒と大木の接点～力持遺跡の調査～」

星 雅之氏（岩手県埋蔵文化財センター）

「放射状集落の展開～大清水上遺跡の調査～」

佐藤淳一氏（岩手県教育委員会）

11月13日（日） 13:30～15:30 教室

「仙台湾周辺の縄文前期～嘉倉貝塚の調査～」

佐藤憲幸氏（宮城県教育委員会）

「米代川流域の円筒土器文化～池内遺跡の調査～」

桜田 隆氏（秋田県教育委員会）

## 【展示解説会】（入館料必要）

①10月10日（月・祝） ②10月29日（土）

③11月23日（水・祝）

14:00～15:00 特別展示室 館職員